

高大連携による協働中国語学習の実践
— 中国語で「つながる」体験がもたらすもの —

Practical Implementation of Collaborative Chinese
Language Learning Through High School-University
Cooperation: What the Experience of ‘Connecting’
in Chinese Can Achieve.

真島 淳¹ 春岡 恵子²

MASHIMA Jun HARUOKA Keiko

投稿日：2024 年 5 月22 日
受理日：2024 年 9 月26 日

1. グローバル・コミュニケーション学部
2. 兵庫県立洲本高等学校

(要約)

本稿では、英語以外の外国語を学ぶ学科、科目を設置しているという共通点を生かした高大連携の取り組みとして、高校生と大学生による準備学習、そして中国語圏出身の留学生を交えた交流授業という2段階で構成する協働中国語学習の実践を行った。

実践の結果、本稿の実践が高校教育の内容の充実に貢献したばかりでなく、授業に参加した高校生・大学生・留学生全員の言語・文化学習を促進することができたと言える。また、年齢の近い大学生がサポート役に当たることで、高校生が学習目標言語である中国語を用いて実際に留学生とコミュニケーションをとることへの心理的な敷居を下げただけでなく、大学生や留学生の姿が一種のロールモデルとなったことで、互いにより刺激になったと考えられる。

現在の年2回という限定的で一時的な協働学習を、いかに年間を通した継続的な協働学習のシステムに変換していけるかが今後の課題である。

(Abstract)

This paper describes the collaboration between a high school and a university that makes use of the common feature of having a department or subject where students learn a foreign language other than English. A collaborative Chinese language learning programme was implemented, consisting of two stages: preparatory learning by high school and university students, and an interactive class with foreign students from Chinese-speaking countries.

As a result, it appears that the practice described in this paper not only contributed to enriching the content of high school education, but also promoted language and culture learning for all the university and international students, as well as the high school students. In addition, the supportive role of the university students, who were close in age, not only lowered the psychological threshold for the high school students to actually communicate with the foreign students using Chinese, the target language of study, but provided a good stimulus to each other as the university students and foreign students became positive role models.

The future challenge is to transform the currently limited, temporary collaborative learning, which is conducted twice a year, into a system of continuous learning throughout the year.

キーワード：中国語、高大連携、協働学習、コミュニケーション、ロールモデル

Key Words: Chinese language, high school-university cooperation, collaborative learning, communication, role models

1. はじめに

高大連携については1999年の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」による影響が大きく、これまでに大学教員による高校出張講義などのイベント企画、高校生の大学施設利用、高大教員の相互交流、高校生の大学での講義聴講、高校生向けの大学オープンキャンパスなどの多くの取り組みが「高大連携」の名のもと実施されている。高大連携の目的、効果としては、高校側にとっては主に生徒の進路選択、教育内容の充実、進学実績の向上などが見込まれ、大学側としては新入生の確保、地域への貢献、学生のニーズとのミスマッチの解消、学生への刺激などが挙げられる。

2013年に公益財団法人国際文化フォーラム（TJF）から発行された「外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言」では「多様な社会のニーズへの対応」、「多言語による情報収集力は日本社会の生命線」、「複眼的思考や視点・多文化的資質の獲得」、「コミュニケーションの深まりと広がり」の観点から複数の外国語を学ぶことの重要性が述べられている（當作靖彦・中野佳代子, 2013, p.11-12）。

文部科学省の学校基本調査（確定値）によると、2021年度の高等学校在学者数は国立、公立、私立合計で4,856校約300万8千人である。その中で、延べ1,190校で英語以外の外国語科目を設置しており、延べ42,324人の学習者がいる。英語以外の外国語科目の履修者は高校生全体の約1.4%に過ぎず、ほとんどの高校生が高等学校卒業まで英語以外の外国語を履修する機会がないことがわかる。英語以外で設置されている言語数は14であるが、言語別に履修者が最も多いのは中国語（457校・履修者数17,847人）となっている。一般社団法人日本外国語教育推進機構 JACTFL（2023）の調査によると、本学が位置する兵庫県では東京（111校）、大阪（72校）に次いで多い42校で英語以外の外国語科目を開講しているが、本学の高大連携校である伊川谷高等学校はその中の1校であり、英語以外の外国語を学ぶ機会を提供している数少ない高等学校であり、2年次よりコミュニケーション類型及び人文社会類型の生徒を対象に中国語の授業を開講している。一方、本学グローバル・コミュニケーション学部には中国語を専門に学ぶ中国語コースがあるだけでなく、本学には中国語圏出身の留学生が多く在籍している。

本稿では、英語以外の言語を学ぶ学科、科目を設置しているという共通の特色を生かした高大連携の取り組みとして、本学グローバル・コミュニケーション学部中国語コースの学生、各学部の留学生及び伊川谷高等学校の中国語選択履修者による協働学習を実践し、参加者の感想文をもとに、高大連携による交流授業における中国語を用いた「つながる」体験が高校生、大学生、そして留学生というそれぞれの参加者にどのような変化をもたらしたのかについて省察を行う。更に省察の結果をもとに今後の実践に向け、授業デザインにおいて改善すべき課題にも触れておきたい。

2. 先行研究

2.1 協働学習の基礎理論

子どもの認知発達には他者や文化との交流を通して成長していくとした社会文化的発達理論を提唱したヴィゴツキー（2001）の発達の最近接（ZPD）領域理論によれば、協働学習は習熟度の異なる

る学習者が共に学びあう過程で、他の学習者とのコミュニケーションにより外言（他人に対して述べる言葉）を引き出し、その内言（自分の頭の中で整理したり確認するための言葉）への転化を促す効果的な学習方法と考えられる（津田，2015）。また、秋田（2007）は、習熟度の低い学習者は、習熟度の高い学習者との相互行為を通じてメタ認知ストラテジーへの気づきと使用を促進し、習熟度の高い学習者は仲間との相互行為によって思考の多様性に気づき、自己を振り返るなどメタ認知を働かせると述べている。また、互惠的学習について秋田（2007）は、教える側は「抽象的に理解していたことと具体的な例がつながり、理解が深まる」とし、一方教えられる側は「ヒントを求めたり、一緒に解いてもらったりして相手の行動や話を見聞きする過程で、教えられる側の子も、適切な援助を受け理解を深める」と述べている。

バフチン（1996）は教室における他者の言葉には情報を単に送り手から受け手に向け一方的に伝達する「権威的な言葉」と相手とのやり取りの中でお互いに影響しあい、自発的な成長を促す「内的説得力のある言葉」があるとしているが、津田（2013）はうまく機能している協働学習において学習者同士の発話では後者のやり取りがなされ、協働学習は学習者が自由に発言し、タスクを遂行する場として位置付けられ、その結果、学習者は教師及び仲間と対等な相互関係を構築しうる可能性をもつと考えている。

津田（2015）は、協働学習では、成績の上下関係やグループ内の力関係など社会的制約から解放され、学習者を自由に活動させるため、間違いを恐れないこと、また間違えても笑わないことを奨励し、そこでは、学習者の情意フィルターが下がり、緊張が和らぎ、互いの経験や情報を共有し、ラポールが形成されるとしている。そして、協働学習では、学習者中心に活動を進めることを旨とし、教師はあくまでファシリテーターに徹し、グループ活動への介入はできるだけ避けたいと述べている。

2.2 中国語教育におけるコミュニケーション活動

植村（2012）は教室外と「つながる」ことを目標として、既習の文法事項を使用して、知り合いの中国人、あるいは学内の中国人留学生にインタビューすることを授業外課題として課した活動を報告している。活動後には「振り返りシート」に記入を行わせているが、振り返りの内容から学習者がインタビューという中国語を用いて「つながる」経験を通じて、中国語によるコミュニケーションを楽しみ、かつ自分の足りないところを実感していることがわかれるとし、自分の足りないところを強化していく重要性を学習者自身が体験的に感じることの意義が大きいとしている。また、学生の中国語学習に対する姿勢が前向きに変化しただけでなく、中国語、英語、日本語といった複数の言語を使い分けてコミュニケーションをとる学習者の姿が、CEFR の理念である「複言語・複文化主義」を体現していると述べている。

一方、寺西（2013）は日本人学生と中国人留学生の混合グループによる中国語文献のピア・リーディング活動実践を報告している。その学習上の効果として、(1) 母語の活用とお互いの言語能力不足の補完、(2) 視点の多様化と、利用できるリソース・ストラテジーの拡大、(3) 学習意欲の強化など情意面における効果、(4) 両者の交流促進と異文化間コミュニケーション能力の育成、(5) 両者の相互作用の中で、文献そのものから得られること以上のことを学べるなどを挙げている。一方、困難と問題点としては(1) 外国語能力不足や互いの習慣やコミュニケーションスタイルの相違からくるコミュニケーション障害、(2) 意見を出すことの回避、(3) 責任感の欠如、(4) 教師が「ファ

シリテーター」、「支援者」などの役割を担う必要性について言及している。寺西（2013）の実践同様、ネイティブとの協働学習型授業の実践例として、森山（2012、2015）による中国、台湾の留学生と学ぶ異文化間相互学習型授業がある。自己紹介やゲーム活動といった教室の「空気」作り、仲間意識の醸成に始まり、グループ会話活動、異文化間コミュニケーション能力養成のための語用論的言語使用規則などを学ぶグループワークを行った後に、日中文化の比較、対照をテーマとしたプロジェクト型学習で終わるというように段階的な授業設計がなされ、一定期間継続するネイティブとの接触を通じ、学生自らが実行し学び取る形式をとり、教師はファシリテーター的役割をになうものとなっている。また、日本人学習者が学習言語を使用しコミュニケーションする情意フィルターの低減に配慮している点も参考となる。

2.3 中国語教育における高大連携

英語以外の外国語教育における高大連携の実践例は管見の限り非常に少ない。中国語教育における高大連携の例として、慶應義塾における高大連携の取り組みが挙げられる（須山、他、2016）。慶應義塾では一貫教育校・大学で中国語教育を担当する教員によって情報共有の必要性が強く意識され、特に高校と大学の間の情報交換が重視された結果、教員有志による懇談会が開かれ、塾内の中国語教育の様々な問題について意見交換を行っている。共有された情報は、選択必修科目の中国語科目のクラス設計、設定に役立てられている。須山、他（2016）は高大連携活動の問題点の一つである、高校生の学力向上が主眼となっており、大学生の学力向上を目指すという視点が欠けている点を挙げ、学習者が高校で学んだ内容をスムーズに大学での学習に移行できるカリキュラムを、教育目標の異なる高校と大学が違いを乗り越え、協力して作り上げていく懇談会の試みが、この問題への答えの一つと言えるだろうとしている。また、拓殖大学では、外国語学部主催で高大連携中国語スピーチコンテストを開催し、高校生と大学生が中国語での朗読、暗唱、弁論を競いあう場を設けている（浅井、2016）。

本稿の実践では、高校生、大学生、留学生の三者が中国語を用いたインタラクティブ活動を行い、高校生はもちろんのこと、大学生は「教える」ことによって高校生のサポートを行い、留学生は母語である中国語だけでなく日本語も用いて高校生の質問に答え、中国語や中国語圏の文化を紹介している。このような協働学習を通して、参加者全ての学び、語学や文化学習への動機強化につながっている点が特徴的であり、上記の高大教員間の情報共有や共同の学習成果発表の場を提供するといった高大連携とは一線を画すものであると考えられる。

3. 高大連携協働中国語学習の概要

本稿の高大連携協働中国語学習は、本学グローバル・コミュニケーション学部中国語コースの学生が「中国語専攻演習Ⅲ（ゼミ）」の一環として、兵庫県立伊川谷高等学校を訪れ、中国語科目を選択履修する高校生が本学の留学生と交流授業を行うためのサポートを行うものである。これまで、2022年から2023年まで2年にわたって実施している。

3.1 学習目標

本稿の高大連携協働中国語学習において、本学グローバル・コミュニケーション学部中国語コースの学生は、これまでに習得した中国語能力を運用し、高校生を主体とした交流授業が順調に運ぶようにサポート・コミュニケーションを行うことを目標とする。この目標は、協働中国語学習が4年間の学修の集大成と位置付けられる卒業研究科目の一環となる授業活動であり、学部の学位授与方針であるディプロマ・ポリシーに掲げられた能力にも共通するものである。

伊川谷高等学校の生徒は、本学の学生との協働学習を通して、中国語コミュニケーション能力を含め、他者を尊重し社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となるために必要な資質や能力を育成することを目標とする。

3.2 参加者

2022年度及び2023年度の参加者は表1の通りである。伊川谷高等学校ではコミュニケーション類型及び人文社会類型の生徒を対象に、2年次に「中国語基礎」(週2コマ、1コマ50分)、3年次に「中国語実践」(週2コマ、1コマ50分)を開講している。本学中国語コースの学生は1、2年次に週6コマ(1コマ90分)の基本中国語科目を履修し、3年次の前期は1学期間にわたる留学(本稿の授業に参加した学生は、コロナ感染拡大防止による渡航制限のため、オンライン留学)を経験している。2023年度は「中国語専攻演習Ⅲ(ゼミ)」を履修する4年次生に加え、伊川谷高等学校卒業生である1年次生も3名参加した。

表 1. 高大連携協働中国語学習参加者

	2022 年度		2023 年度	
	11 月 9 日	11 月 16 日	9 月 8 日	9 月 15 日
伊川谷高等学校 中国語基礎履修者(2年次)	9	9	20	17
伊川谷高等学校 中国語実践履修者(3年次)	10	10	9	9
神戸学院大学 GC 学部中国語コース学生	12	12	11	10
神戸学院大学 留学生		4		6
教員	3	2	2	2
計	34	33	42	44

3.3 授業内容

2022年度、2023年度とも2回の授業を行った。第1回目の授業(2022年11月9日、2023年9月8日)は、第2回授業で実施する留学生との交流授業の準備作業を行った。まず、高校生と大学生との混合グループを作り、簡単な自己紹介を行った。その後、配布されたワークシート(3.4参照)をもとに、留学生にインタビューする質問を一緒に考えた。高校生は既習の中国語を運用し、教科書やこれまでの授業で配布された資料なども参考にしながら質問を考えた。大学生は高校生の状況を見ながら適宜声かけを行い、質問を考えるサポートを行った。教員は机間巡視を行い、必要に応じて声かけを行ったが、高校生のサポートはできる限り大学生が主体で行うように最小限にとどめた。

第2回目の授業（2022年11月16日、2023年9月15日）では、留学生を授業へ招待し交流授業を行った。お互いに簡単な自己紹介を行った後、第1回目の授業で準備した質問を用いて留学生へのインタビューを行った。交流授業でのインタビューも、高校生が主体となってい、大学生はサポートに徹した。留学生へは事前に、高校生への質問に答えるだけでなく、同じ質問や関連する質問を高校生へ聞き返すように依頼をして、会話が双方向になるように努めた。授業終了5分前に、全体でまとめを行い、授業後に感想と振り返りの記入を行った。

3.4 教材

例として中国語基礎履修者(2年生)を対象として使用した教材を図1と図2に示す¹。図2のワークシートはグループメンバー、中国語質問、日本語質問、感想の4つのパートから構成されている。中国語基礎、中国語実践ともに1コマ50分、週2コマの履修であり、高校生の既習単語、表現が限られてくる。そのため、既習単語、表現を運用して簡単な中国語の質問を考え、中国語でまだ表現できない項目については日本語で質問を考えることとした。

また中国語基礎履修者の中国語学習歴は半年ほどで、楽しみながら中国語を学習することで、中国語に対する興味を深めてもらおうと、図1のすごろく形式のワークシートを併用した²。図1の数字やアルファベットは図2のワークシートと呼応しており、更に留学生が質問するターンや、既習のあいさつことば、数字などのマスも設け、既習内容を復習できるよう工夫をほどこした。

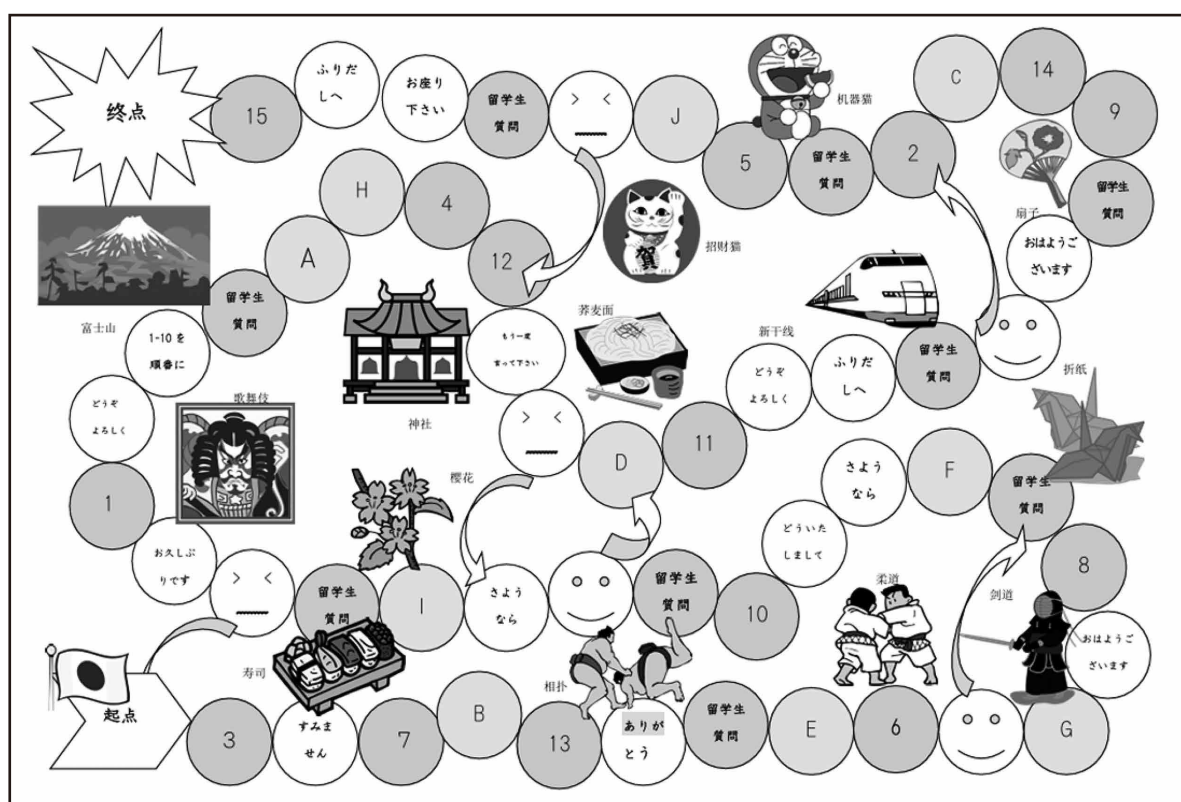


図1. 中国語基礎履修者(2年生)用すごろくシート

中国語交流授業ワークシート					
年	組	番	氏名		
1. 自己紹介をして、グループメンバーの名前を記入しましょう。					
2. 今まで学習した中国語を使って、留学生に尋ねる質問（簡体字・ピンイン）を考えましょう。					
	質問		質問		質問
1		2		3	
3. 日本語で留学生に尋ねてみたいことを考えましょう。					
	質問		質問		
A		B			
C		D			
交流授業の感想を書きましょう（印象に残ったこと、新しく知ったこと、考えさせられたことなど）。					

図 2. 中国語基礎履修者（2 年生）用ワークシート

4. 実践結果と考察

この章では本稿の高大連携協働中国語授業に参加した高校生、大学生、留学生が授業後に記入した感想文（計 79：高校生 46、大学生 27、留学生 6）をもとに、KH Corder によって抽出した参加者構成別の高頻出語（表 2、上位 10 個、留学生については頻度 2 回以上）もふまえながら、感想文の内容の一部を引用して実践結果の分析し、考察を行う。

表 2. 感想文における参加者構成別高頻出語

高校生		大学生		留学生	
語	頻度	語	頻度	語	頻度
思う	41	中国語	65	交流	11
中国語	32	高校生	57	高校 / 中国語	9
留学生	25	教える	43	高校生	6
中国	24	思う	39	伊川谷 / 活動 / 皆さん / 経験 / 今回 / 参加 / 思う / 中国	4
楽しい	23	質問	32	楽しい / 知る / 日本 / 文化 / 本当に	3
質問	21	交流 / 自分 / 留学生	27	ゲーム / コース / 学ぶ / 感じる / 嬉しい / 緊張 / 見る / 行く / 子 / 持つ / 色々 / 長い / 髪の毛 / 非常 / 勉強 / 理解	2
大学生	20	考える / 勉強	23		
知る / 話す	18	高校	22		

高校生		大学生		留学生	
勉強	15	楽しい / 話す / 感じる	19		
交流	14	授業	18		

4.1 学習対象言語の理解と運用

高校生の感想文に「知る」、「勉強」という語が高頻度で出現しているが、生徒が本稿の協働学習で学んだ中国語は、語彙だけでなく、文字（漢字）、音声（発音）、表現（文法、フレーズ）など多岐にわたっているのが高校生の感想文から見て取れる。協働学習が限られた時間ではあるものの学習対象言語（中国語）の理解促進につながったと考えられる。

- ・留学生の発音を生で聞くことができてとても勉強になったし、楽しく新しい単語を学んですることができたので良かったと思いました。(2023 高 2J)
- ・知らない文法をたくさん教えてもらってたのしかったです。(2023 高 2C)
- ・すみませんとどういたしましてを初めて知った。(2023 高 2D)

同時に学習対象言語の中国語について、一つの漢字が多く語彙の中で共通して使用されていることや、中国語圏の中で使用される中国語に地域性、多様性があることを交流の中で発見した生徒がいることも非常に興味深い。

- ・まだ知らない漢字が思ったより難しくて書くのが大変だったけど、一つ知れば違う言葉のやつにも使われておもしろいなと思いました (2023 高 2Q)
- ・中国の地域によってスポーツの言い方に違いがあったり、意味が違うこともありました。(2022 高 3E)

高校生の感想文において「中国語」、「留学生」、「質問」、「大学生」、「話す」という語が高頻度で出現しており、大学生の感想文でも「中国語」、「質問」、「考える」という語が多く出現している。高校生が知識面だけでなく、実際に学習対象言語である中国語を運用して、大学生のサポートを得ながら、自分たちで留学生への質問を考え、実際に質問することを通して、本稿の協働学習が中国語運用力の向上に少なからず貢献したと考えられる。また、高校生だけでなく留学生の日本語運用力の向上にも役立ったことがわかる。

- ・普段、このようにして中国語を自分で考えて文にし、声に出して実際に話すことがないので、とても良い機会になりました。(2022 高 3H)
- ・発音が難しくて、うまく伝わらないことがあったけど、大学生の方がアドバイスをくださったおかげで、沢山の質問をすることができました。(2022 高 3A)
- ・今回は伊川谷高校で皆さんと問題のやり取りをしたり、ゲームをしたりで、お互いに他国の文化を知り、コミュニケーションの経験を積みました。色々な知識や言葉など知ったの上に、話すの力もよくなりました。(2023 留 B)

4.2 学習対象言語を使用してつながる体験

本稿の協働学習が、高校生へ学習対象言語を使って他者とつながる機会を提供し、多くの高校生が学習対象言語を用いて交流することに対して、ポジティブな感想を述べている点は、本稿の協働学習の大きな成果であると考えられる。

まずは、「楽しい」、「経験」、「嬉しい」といった語が参加者の感想文において高頻度で出現しており、高校生、大学生、留学生を問わず多くの参加者が、学習対象言語や母語を使って他者と交流することに対して、純粋に「おもしろい」、「楽しい」、「また交流したい」、「貴重な経験になった」と感じている。

- ・ こういう交流は初めてで、すごく緊張したけど、楽しかったです。時間の関係でたくさん聞けなかったのも、もっといろんなことを知りたいなと思いました。(2022 高 2G)
- ・ 留学生の方や、大学生の方といろいろ中国語を交えて話せて楽しかった。いろいろと留学生の方が思っていることや、経験などが聞けてよかった。今後も中国人の方と話したりする機会があれば、いろいろと質問もしてまたやりたいなと思いました。(2023 高 2C)
- ・ 全部の質問を聞くことはできなかったけど、1つ1つの質問にいてねいに中国語と日本語で答えてくれてとてもたのしい時間になりました。(2023 高 2P)
- ・ またみんなと交流して改めて中国語の楽しさ、交流の楽しさ、勉強した別の言葉が通じることの嬉しさを感じることが出来、とても有意義な時間でした。(2022 大 D)
- ・ 今回の活動で皆さんと一緒に伊川谷高校へ日本の高校生達や、中国語コースの先輩達と交流できるのが非常に楽しくて面白かったです。自分の経験にも、日本語の勉強にも役に立てると思います。これからも、このような活動を積極的に参加したいと思います。(2023 留 B)

次に、参加者の感想文の中で「交流」という語が高頻出となっているが、実際に交流することを通して、自身が今まで抱いていた中国語圏出身の方に対するイメージが覆されていることもわかる。情報があふれている今日において、自身が他者と交流した実経験をもとに、自分が抱いていたステレオタイプについて気づき、修正が行われていることは日頃の授業ではなかなか得られない貴重な経験であると言える。また、実際に中国語を使って交流し、自分の気持ちや考え、情報が少しでも伝わることに喜びや楽しみを感じ、中国語を用いて交流することへの心理的な敷居が低くなっていることも本稿の協働学習の大きな成果と言える。

- ・ 勝手なイメージ、中国人の方はとてもこわいイメージがありました。でもとても優しく、おもしろくて楽しかったです。また交流会したいです。(2023 高 2H)
- ・ 中国語を話せることで世界中の人と話せると知った。(2023 高 3A)
- ・ 留学生の人と話して、やっぱり聞き取れない事が多かったけど、話が伝わるとやっぱりうれしかったし楽しかったです。留学生の方々に対しての印象は、とてもやさしくて話しやすかったです。(2023 高 3G)
- ・ 母語が違えど言語を学ぶことで初対面の方と仲良くなれることは素晴らしいと改めて思いました。

高校生の方の中には将来のことを考えて高校生のうちから中国語を勉強しているという方もいらっしゃるって、私自身もとても刺激を受けました。(2022 大 J)

本稿の協働学習では、いきなり交流授業ではなく、1コマの学習時間を設けて準備作業を行った。「大学生」が高校生の感想文の高頻出語となっており、準備の時間を設けるだけでなく、大学生が高校生のサポートを行う形式が、高校生が交流する上で、心理的に大きな後ろ盾となっていることがわかる。

- ・初めてこういった交流授業をしてみて、中国語で留学生の方に質問するのは難しそうと思ったけど、学院の方が優しくたくさん教えてくれてできました。今まで直接、中国の方と話すことがなかったので貴重な体験になりました。(2022 高 3C)
- ・最初、大学生と留学生が中国語で話してて全く分からなくて質問出せるかなと心配しました。でも大学生の人が質問の読み方や留学生が質問に答えてくださったのを日本語になおしてくださって質問が出来たと思ってうれしくなりました。(2023 高 2H)

4.3 言語学習に対するメタ認知の促進

高校生、大学生ともに、「勉強」が感想文の高頻出語であり、高校生の感想文では「難しい」や「頑張る」といった語も多数出現している。準備作業と交流授業の両方において自身の中国語力及び中国語学習について振り返り、更なる学習の必要性について感じており、本稿の協働学習が高校生と大学生両方に益する学びの場になっている点は注目に値する。現段階では、多くの生徒が「頑張りたい」、「もっと勉強する」などという大まかな目標を提示するにとどまっているが、今後は協働学習のまとめとして、解決策を今後の具体的な学習目標として提示させるところまで行い、本稿の協働学習が一過性のものにならないように改善が必要であると考えられる。

- ・質問を考えるのも言うのも自分だけじゃできないので、もっと勉強してたくさん話せるように頑張りたいなと思いました。(2022 高 3C)
- ・中国語を聞きとるのが難しかった。読めない漢字が多くてもっと勉強しないといけないと思いました。ネイティブの方の普段しゃべるスピードがとても速いなと思いました。(2022 高 3D)
- ・人生で初めて中国人の方と話してみて、言いたいことがいえなかったり、発音がうまくいかなかったり、悔しいことが多かった。これからはすらすらと中国人と話す際に悔しい思いを少しでも少なくできるように、これからも中国語の勉強をがんばりたい。(2022 高 3G)
- ・簡単な文章が分からない時があったのできちんと勉強しないといけないと再確認しました。また、高校3年生の子もとても中国語が上手くとても刺激を受けました。(2022 大 D)
- ・中国語・日本語のレベルが全く違う双方の間を取り持つことで自分の翻訳力が試されたと感じました。その中で、自分が中国語に翻訳できない言葉があったり、留学生の日本語力に助けられた所もあったので、もっと中国語を学ぶ必要があると感じました。(2023 大 L)

4.2において大学生がサポート役を担うことが、高校生が交流を行う上での大きな後ろ盾になっ

ていることを述べたが、大学生が高校生のサポートだけにとどまらず、中国語を学ぶ上でのお手本というべきロールモデルになっていることもわかる。

- ・神戸学院大学の学生さんが来てくれた時に、学生さんが日本語のしつもんをささっと中国語に変えていたのがすごいと思いました。しかもピンインもすぐを書いていて、私はなんとなくで読めても漢字とピンインは書けないのでパパッと書けるようになりたいと思います。(2023 高 2E)
- ・お姉さんが中国語で話しているのをみて私もいつかこのくらい話せるようになればいいなと思った。(2023 高 2Q)

同時に、高校から英語以外の言語の学習に真剣に取り組む高校生の姿も、大学生にとってよい刺激となり、お互いに学習モチベーションを高めあっていることがわかる。

- ・2年生のレベルと、3年生のレベルがかなり違っていて、見えて面白かったと同時に、3年生のレベルが非常に高くかつ勉強熱心で、取り組む熱心さを見習わなければならないと感じました。(2022 大 A)
- ・留学生の方たちも日本に来て3年と言っていたけどほとんど完璧に話せていて驚きました。高校生の方も週に2時間程度の中国語学習であれだけ話せるのはすごいと思いました。(2023 大 J)
- ・留学生が高校生になぜ中国語を学んでいるのか質問した際、将来ホテルに就職したいから、コロナがきっかけで中国のニュースを見てみようと思ったからと答えていて、私より4つも年下なのに考えがしっかりしていて、私も見習わなければならないと感じました。(2022 大 B)

本稿の協働学習は高校生を主体としたため、参加した大学生はサポート役に徹し、中国語を学ぶというより、中国語を教えることを求められた。高校生の性格、学習レベル、学習経験を探り、参考にしながら、他者に何かを教えるという経験は、これまでに経験したことのないコミュニケーションのスタイルであり、大学生にとってコミュニケーションスキルを磨く機会となったことがわかる。この点については、「教える」という語が大学生の感想文において高頻度で出現していることから顕著である。

更に、2023年度の協働学習に参加した伊川谷高等学校の卒業生(2023 大 C)は、大学卒業後中国語を教える仕事に就きたいと考えている。この学生は、本稿の協働学習に参加後、中国語を教えたいという気持ちを強め、現在では本学近くに位置する団地で地域住民を対象として中国語講座の講師をつとめることとなった。本学グローバル・コミュニケーション学部中国語コースは教職課程を開設していないのだが、本稿の協働学習が中国語を教えることに関心のある学生にとって、実践の場ともなりうる。

- ・留学生の方が教育を学んでるだけあって、教えるのが非常に上手く、根気強く復唱させたり、言葉の由来を詳しく話し高校生が理解できるまで説明しているのを見て、人に物を教えることが得意ではなかったため、教える姿勢を見習おうと思いました。(2022 大 A)
- ・高校生たちが分からないところがあった時は、すぐに答えを教えるのではなく、高校生達が自分

で考えて答えられるように、教えるようにしました。人に教えるのは、2倍の知識量が必要とされているようにとても難しいのですが、人に教えるにあたって、自分の知識もつき、自分が伝わったと思っていたところが、相手からしたら全く理解できていないところがあったので、そういうところも大変難しいな感じました。伊川谷高校の交流授業を踏まえて、人に物事などを教えることは難しいのですが、まずは自分が思うように伝えてから、相手が理解できなかったところを再度理解できるように伝えるということは、とても難しいのですが、大変勉強になりました。(2022 大 F)

- ・自分が中国語を教えるっていうのはなかなか難しいことだと感じた。自分なりの覚え方などがあるので教えるとなるとまた違うなと思った。一人一人高校生たちは個性があり、その子に合った教え方や話をふったりするのが難しかったですが、うんうんと私の話を聞きながら理解してくれたり、メモをとってくれたことが嬉しかった。(2023 大 A)

4.4 文化の理解

「中国」、「日本」、「文化」といった語が高校生や留学生の感想文において高頻度で出現していることからわかるが、今回の協働学習の中で、中国語や日本語を用いて、実際に中国語を母国語とする留学生と対話する中で、自他の文化についても学ぶことができています。感想には詳細が記述されていないが、自他の文化を理解するだけでなく多様な文化を再認識し、日中文化間の共通性や相違性について分析を行っている生徒もいることは非常に興味深い。今後は、ただの振り返りでの記述にとどめず、交流授業で感じたことを出発点に日中文化の共通性と相違性を研究し、発表するなどに展開できるとよい。2.1 で提示した寺西（2013）や森山（2012、2015）の実践のように、継続的な協働学習へと発展させることも可能である。

- ・どの国の人でも共通なことはいっぱいあるなと思いました。(2022 高 2C)
- ・一緒に授業を受けた中国人の方は、オープンな方だと思ったし生まれた国が違うだけで日本にもいそうな人だと感じました。(2022 高 2F)
- ・好きなタイプからは日本人の考え方と中国の違いを感じた。中国の出身でも、行ったことのない場所もあったりして、中国の方みんなが行ったことがあるわけではないことも知った。同じアジアの地域でも、それぞれの良さもあり、文化の違いもあった(2022 高 3E)
- ・色々な中国の文化や料理について知ることができた。中国人から見た日本と、日本人から見た中国では違うところもあったけど、想像どおりなところもあった。空気が読めることがすごいとお聞きしてたしかになど納得した。四川に行ったらおすすめされた甜皮鴨を食べたいと思った。(2023 高 2A)
- ・色々な中国料理を知れてよかったし、食べてみたいと思いました。中国人留学生と初めて交流してみてコミュニケーションをたくさんとれて楽しかったし、中国と日本で似ているところや違いもたくさんあって異文化を知れてよかったです。(2023 高 2B)

留学生にとっては日頃入ることのない日本の高校で目にするものの多くが異文化体験だったことがわかる。

- ・留学生として日本の高校に行くのは初めてです。見学にならないですが、日本の高校の雰囲気を少し感じましてとても新鮮でした。職員の机、筆で書いた注意事項、または「姿勢を正そう」というような標語などのことが教科書あるいは授業では学べないことです。(2022 留 A)
- ・今回の交流会で長い髪の毛の男の子のことを気づきました。中国の普通の高校には男の髪の毛の長さに厳しく管理されているので、羨ましいと感じました。(2023 留 C)

4.5 その他

4.3において大学生が高校生のロールモデルになっていることを述べたが、その他にも協働学習の過程において、大学生活に関する話題が高校生と大学生の間の距離を縮める潤滑油の役割を果たしていることがわかる。高校生にとっては、留学生だけでなく、大学生の姿も今後の進路選択の参考になるかと思われる。また、本稿の実践により、「外国語＝英語」という枠組みから出て、複数の外国語を学び、複眼的思考や視点、多文化的資質の獲得に今後も取り組んでいく必要性も強く感じられた。

- ・大学のことを聞けてよかった。(2023 高 3A)
- ・大学生活のお話しもしたところ、楽しく会話ができ、大学生になってからしたい事なども話していて、大学生になるにあたって目標などをしっかり持っていたので素晴らしいと思いました。(2022 大 F)
- ・高校で中国語を勉強するのはなかなか珍しいと思うのですが、高校生の時から中国語や韓国語などを好きな生徒が学べるというのはすごくいいと思いました。(2023 大 M)

5. まとめと今後の展望

本稿の高大連携による協働中国語実践であるが、第4章の考察より、高校教育の内容の充実に貢献したばかりでなく、授業に参加した大学生そして留学生全ての言語・文化学習を促進することができたと言える。また、大学教員による高校生を対象とした講義とは異なり、年齢の近い大学生がサポート役に当たることで、高校生が学習対象言語である中国語を用いて実際に留学生とコミュニケーションをとることへの心理的な敷居を低くしただけでなく、大学生や留学生の姿が一種のロールモデルとなったことで、互いにより刺激になったと考えられる。本稿の協働学習が高校生の進路選択にどれほどの影響を与えたかについては、別途追跡調査が必要であるが、協働学習のように高校生を取り込んだ形式の方が、大学から高校生へ向けた一方的な講義やオープンキャンパスの取り組みよりも新入生確保や学生のニーズのミスマッチの解消などの面において、大学側にとって効果的ではないかと考えられる。

更に、大学教員と高等学校教員の間で意見交換の場が生まれ、協働で授業を設計、実践することができたのも本稿の協働学習の大きな成果の一つである。高大間で教科教育の知識、経験を共有することができるだけでなく、生徒・学生に関する情報共有のパイプを構築することができたのは学生、教員の両方にとって本稿の実践の成果ではなかろうか。

本稿の実践を今後も継続していきたいと考えているが、現在の一年間に2回という限られた一時的な協働学習を、いかに年間を通した継続的な協働学習のシステムに変換していけるかが今後の課題である。例えば、表3のような年間を通じた取り組みが考えられる。

表3. 授業実践の計画

第1回(6月)	高校生と大学生のオンライン交流
第2回(9月)	高校生と大学生による、留学生との交流準備
第3回(10月)	高校生、大学生、留学生の交流
第4回(11月)	交流を通してそれぞれの立場で発見した疑問や課題についての探究と発表準備
第5回(12月)	高校生、大学生、留学生による対面またはオンラインでの探究成果の発表
第6回(2月)	まとめと振り返り

まず6月頃のオンラインで交流であるが、今後の留学生との交流に向けお互いを知っておくことで、対面のコミュニケーションを円滑に行うことができ、準備時間を最大限に活用することに繋がる。前述の感想にあったように、交流を通してそれぞれがそれぞれの立場で、言語・異文化・学習などの側面からの気づきがある。それらを更に探究し、理解を深め、共有するため、11月に発表の準備を行い、更に対面またはオンラインによる探究成果発表を12月に行う。ここでの使用言語は、高校生の中国語理解のレベルを考慮して、日本語で行うこととする。最後に総括として、年度末の2月にこの協働学習から学んだことのまとめと振り返りを行う。

なお、高等学校では、これら一連の取り組みは中国語の授業という教科学習の場においてだけではなく、総合的な探究の時間にも組み込んでいくことを想定している。この活動は、「探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成する」(文部科学省, 2018)という総合的な探究の時間の目標とも矛盾しない。また、評価に関しても、教科や総合的な探究の時間に行う協働学習として、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点から行うことを検討している。

謝辞

本稿の高大連携協働中国語学習を実践するにあたり、兵庫県立伊川谷高等学校関係者、本学国際交流センター 小山田真弓氏、広報部 高村洋一氏の多大なる協力を賜った。ここに感謝の意を表したい。

参考文献

- [1] 秋田喜代美(編著)(2007)、『授業研究と談話分析』、改訂版、東京、放送大学教育振興会、139
- [2] 浅井澄民(2016)、「外国語学習とアクティブ・ラーニング—拓大的グローバル人材育成を目指して—」、『拓殖大学語学研究』、134、109-119
- [3] 一般社団法人日本外国語教育推進機構 JACTFL (2023)、「日本の高等学校等における英語以外の外国語科目の開設状況に関する調査」https://www.jactfl.or.jp/?page_id=4240 (閲覧日: 2024年4月28日)

- [4] レフ・セメノヴィチ・ヴィゴツキー (2001)、『思考と言語』、(柴田義松訳)、東京、新読書社
- [5] ミハイル・バフチン (1996)、『小説の言葉 (付：小説の言葉の前史より)』、(伊藤一郎訳)、東京、平凡社
- [6] 文部科学省 (2018)、「高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説 総合的な探究の時間編」
https://www.mext.go.jp/content/1407196_21_1_1_2.pdf (最終閲覧日：2024 年 9 月 16 日)
- [7] 文部科学省 中央教育審議会 (2019)、「初等中等教育と高等教育との接続の改善について (答申)」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm (閲覧日：2024 年 4 月 28 日)
- [8] 文部科学省 (2021)、「令和 3 年度学校基本調査 (確定値) の公表について」https://www.mext.go.jp/content/20211222-mxt_chousa01-000019664-1.pdf (閲覧日：2024 年 4 月 28 日)
- [9] 森山美紀子 (2012)、「日中台学生跨文化交际课程的教学实践及其调查分析」、『東海大学紀要 外国語教育センター』、33、57-69
- [10] 森山美紀子 (2015)、「異文化間コミュニケーション能力養成を目指す留学生と学ぶ中国語会話授業の実践」、『中国語教育』、13、240-257
- [11] 須山哲治、山下一夫、吉川龍生 (2016)、「慶應義塾の中国語教育における高大連携 (1)：全塾懇談会の理念と既習者の扱い」、『慶應義塾外国語教育研究』、13、153-161
- [12] 寺西光輝 (2013)、「中国人留学生と日本人学生による協働学習—中国語文献のピア・リーディングを通して—」、『中国語教育』、11、67-87
- [13] 當作靖彦、中野佳代子 (2013)、「外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言、公益財団法人 国際文化フォーラム (TJF)」
- [14] 津田ひろみ (2013)、『学習者の自律をめざす協働学習 (中学校英語授業における実践と分析)』東京、ひつじ書房
- [15] 津田ひろみ (2015)、「協働学習の成功と失敗を分けるもの」、『リメディアル教育研究』、10/2、25-33
- [16] 植村麻紀子 (2012)、「21 世紀型スキルの養成と中国語教育—「つながる」をキーワードに」、『中国語教育』、10、105-126

注

- 1 「中国語実践」を履修する 3 年生も図 2 とほぼ同様で、中国語の質問の箇所に自分の答えを中国語で書き入れる欄を設けたワークシートを使用した。
- 2 図 1 のワークシートは「【虹色日本語教室】スパイスが効いたゲーム・教材・活動集」の「動詞すごろく (<http://2216.jp/blog-entry-23.html>)」を研究者が編集して作成した。